

「口承文芸」「民俗」研究の可能性を問う

―昭和初期からの照射―

日本口承文芸学会では、二〇一一年度大会において、「口承文芸研究の再編成」（於神戸女子大学）、また、二〇二二年度大会において「口承文芸研究は都市伝説をどう扱うか」（於大山市福祉会館）と、続けて「口承文芸」の語を冠したシンポジウムを企画した。

「口承文芸」が学会の名称を構成する重要な一部である以上、これをシンポジウムのタイトルに用いるのは、自然だろう。しかし一方、本学会では「〈口承〉研究」という語が一九九一年度大会（於筑波大学）と二〇〇一年度大会（於名古屋経済大学）とのシンポジウムに試みられ始めた。これには、従来の「口承文芸」研究という語に基づく研究の行き詰まり、限界が指摘され、「口承文芸」の語としての有効性が冷静に吟味されるべきだという認識があったことと思われる。

さて、いうまでもなく、「口承文芸」の語は昭和初期に用いられ始めた（柳田國男「口承文芸大意」一九三一年）。これもまた、いうまでもなく、「口承文芸」の語の始発において、そ

れは新鮮な響きを持ち、斬新な可能性を持つ語として、意識されたのだろう。それでは、その当時、どのような語が「口承文芸」の周囲を取り囲み、それらがどのように処遇されていたのか。その中から、「口承文芸」の語が、どのような経緯を経て優位に競り上がっていったのか。

これらを、改めて振り返り、「口承文芸」の語の「来し方」を、取り分けその黎明を問い質すことは、これからの「行く末」すなわち将来を構想する上で、有効ではなからうか。何のことはない、かつて柳田國男が「民俗」について構想していたことを「口承文芸」の語に施すだけのことなのだけれども、もし、近年の「〈口承〉研究」の語が主張された文脈から窺えるような「口承文芸」の語のいまここにおける時を経てこびりついた手垢による不都合があるのならば、いまここに改めて「口承文芸」の語の黎明期の文脈における可能性を問い、また、当時の対峙する語群の可能性をも問い、未発の可能性を発掘することが、「口承文芸」研究の語を生かし直すにせよ、「〈口承〉研究」の語を新たに鍛練するにせよ、有効だろうという見通しである。ただし、ここで注意したいのは、問題にする「領域」をいまこの「口承文芸」研究が押さええているそれだけに限りたくないということだ。いまここからは、一見、思いがけない文脈・背景が起動している可能性がある。そういう時代として、昭和初期を改めて地図上に記し直す作業をここでは試みたい。その広がりを見るために「民俗」という一語もここに加えておいた

が、実はそれだけではない、思いがけないつながりや広がり
に注意を払いたい（なお、「可能性」を問うことは「不可能性（＝
限界）」を描き出すことでもあるだろう。）（高木史人）

問題提起

橋正一の個人雑誌『方言と土俗』から見えること

—「方言」研究と「口承文芸」研究との交差点として—

高木史人（名古屋経済大学）

〈ことばの聖〉@京都 —新村出と民俗学的言語研究の交点—

菊地 暁（京都大学）

雑誌『掃苔』に読む昭和初期「掃苔」趣味の諸相

—その連続性と画期性について—土居 浩（ものづくり大学）

「民俗芸術」の可能性と限界 真鍋昌賢（北九州市立大学）

コメント

川村邦光（大阪大学）

*右は大会プログラムに掲載したものの再掲である。

考えるヒントとしての昭和初期 —シンポジウムをふり返って—

高木 史人

最近、小学校国語教科書に取められた昔話教材について小論
を著した¹。そのプロローグに柳田國男の『日本昔話集（上）』
（アルス、一九三〇年）の「はしがき」を引いた。いまこの
教科書教材を論じる当たって、昭和初期の文章を引くのが
妥当かどうかなどと考えることもなく、思えば安易な引用だっ
たかもしれないけれども、だがそうとも言い切れない気がする。
人生に、繰り返し、振り返ってしまう、振り返らざるをえない
ような切実な場所があるように、昔話研究や民俗学にもそうい
う場所があるようだ。その代表的な場所の一つが一九三〇年前
後、昭和初頭の柳田國男周りだったと思う。

この場所を繰り返し取り上げるのは、単なる懐古趣味ではな
い。何よりもこの場所には、（いまこの視線からすると）混
沌がある。混沌は、単に学問的な未分化ということでもあるの
かもしれないが、いまここでは接続の用途が失われてしまった
こととことが結びついていたということであったり、あるい
はその逆であったりしたということでもある。その意味で、い
まここに、昔話研究や民俗学の行く末に迷ったり途方に暮れた